

19世紀中葉の英国におけるウェスレー派メソディズムの 教育政策と民衆学校教育について (4)

-改正教育令との関連 (5)

ウエストミンスター師範学校と教育実習校の変化-

青 木 秀 雄

目 次

はじめに

I 1861年ウェスレー派の状況

- (1) ウエストミンスター師範学校の増築
- (2) ニューカッスル諮問委員会報告
- (3) 61年改正教育令覚書

II ウェスレー派の見解

- (1) 教師の知識と教養
- (2) 3R'sと民衆教育 付記

III 改正教育令の修正案

- (1) 1862年2月の修正改正教育令
- (2) 1862年4月の修正改正教育令
 - ア 改正教育令に対する連合教育委員会抗議の表明
 - イ ウェスレー派の4月30日議事録パンフレット

IV 改正教育令発行と対応

- (1) 改正教育令の発行
- (2) ウェスレー派教育委員会の対応

V 改正教育令発行後のウエストミンスター師範学校の対応

- (1) 教員見習生制度と同師範学校
- (2) 教員資格試験合格者の推移
- (3) 同師範学校の再増築と財政難

(以上, 前号まで)

VI ウエストミンスター師範学校と教育実習校の変化

- (1) 師範学校の教科目内容の変化
- (2) 教育実習校におけるスタンダード試験

VI ウェストミンスター師範学校と教育実習校の変化

ウェストミンスター師範学校の教科と教育実習の内容は、改正教育令発行後どのように変化したのであろうか。また、同師範学校に付属する教育実習校と、モデル校の教育内容とそのレベルの変化について、小論は改正教育令下のスタンダード試験結果など視学官報告書に基づき検討するものである。

(1) 師範学校の教科目内容の変化

教員見習生制度を重視するウェスレー派教育委員会が、その制度軽視を示す枢密院教育委員会覚書に対して強く抗議し、その結果として、1864年に枢密院教育委員会より通達が、同師範学校校長John Scottおよび教頭William Sudgen宛に送付されたことは前号にて引用した。その書簡の後半には、女王奨学金試験の受験科目と実施方法が下記のように指定されている。

1)

女王奨学金試験受験生の科目は、男子に対しては、文法・学校経営・算数・ユークリッド幾何 (Book I)・代数の I・地理・英国史である。女子に対しては、ユークリッド幾何を代数に替え、裁縫および家庭科 (Domestic economy) を課す。これら7教科目の試験内容の傾向を理解するには、おそらく返送されている昨年の問題に則り学習することが一番良い方法であろう。

教員見習生としての実習歴のない受験生は18歳以上でなければならない。試験は、クリスマスの1週間前に実施される。受験生はウェスレー派の協会に所属し、宗教の知識と人格についての予備試験に合格していなければならず、2年間の在学期間後は、ウェスレー派教育委員会が管理する学校に勤務することを誓約した者でなければならない。

M・アーノルド (M. Arnold) は、ウェストミンスター師範学校を改正教育令発行後の63年に視察した。彼はその3年前にも、ウェストミンスター師範学校を訪問している。その様子が、1862-3年の「枢密院教育委員会報告書」(pp. 266-8)に示されている。「この師範学校の昨年の教育課程は注意深く変更され、新たなシラバスの要請によって教師の役割が多少変化した。算数には以前よりも重点が置かれ、歴史や地理は少なくなった。試験科目として、暗唱と作文が文法に付加された。これらが加えられたことは大いに有益であろうと納得した。」²⁾

Pritchard, F.C. は下記のように指摘している。³⁾

ウェストミンスター師範学校のカリキュラムにおいても、幾何などの高等数学は廃止された。一番顕著な変更は、学校管理に関する教科であって、時間割の作り方、読・書・算の教育技術、道徳指導の訓練、収益法に関する内容のみに限定されてしまった。

また、歴史や地理への重視は減少し、算数教育がより注目されて、作文と記憶力に頼る学習が強化されるようになった。

アーノルドは、先に述べたように、ウエストミンスター師範学校を改正教育令発行後に視察した際、教頭のWilliam Sudgenの学級管理についての講義を視察し、下記のように賞賛している。

Sudgen氏は実践的な学級（学校）管理（school-keeping）の授業で、処罰というテーマについて教授していた。彼の体験に基づき、体罰（corporal punishment）と退学処分についての講義を展開し、説得的な実践的結論へと導いた。学校（学級）経営（school management）というような、表面的で活気のない授業において、かくも上手に教授していることに感心し、また、その健全で役立つ講義内容に大変興味を覚えた。⁴⁾

しかし、アーノルドはこれに次いで、Sudgenの化学の講義を視察し、同師範学校の実験室が整備されていないことを批評して、改善の必要性を説いている。⁵⁾教育技術以上に、教育的な素養の観点に視察のウエートを置いて、彼が報告していることが窺われる。

ウエストミンスター師範学校においても教科目編成は、やはり枢密院教育委員会の女王奨学金試験に合わせたものに変化した。男子は文法、学校経営、算数、ユークリッド幾何、代数、地理、英国史、女子はユークリッド幾何に替えて裁縫・家庭科という7つの教科目を中心にした教育に重点がおかれ、彼らウェスレー派教育委員会自身が恐れていたように、高度に教養的な科目は削減されてしまった。

アーノルドが視察した翌年、64年度のウェスレー派の教育に対するDr. Morell視学官の報告書（「枢密院教育委員会報告書1863-4年」pp. 362-5）において、教育実習の方法が下記のように記述されている。⁶⁾

1年次は、週2時間を教育実習校で過ごし、時々教員の模範授業を参観する。しかし主には、指導者の管理の下にクラスの生徒の教育に従事する。また、ローテーションにより、実習学校で多人数学級（a large division or section）の規律と学力向上をめざす教育実習を、まる1週間にわたり実践するという教育が行われる。そして、各々の指導担当教員から、教頭に対して逐次学生の実習についての報告書が提出される。その後に継続して、モデル校での1週間を実践的教育ではなく、全体の運営についての観察期間として、学生に綿密なノートをとらせている。担当教員よりの報告は、修正されつつ教頭に次々と報告される。

2年次からは、クラスの教育への従事と、モデル校における教壇実習と授業参観は免除される。しかしそれに替わって、実習学校での多人数児童を2週連続してもつこととなる。彼らの努力と技能についての報告は教頭に対して各々行われる。このような多人数学級での教育実習課程は、今年度より初めて導入されたものである。この教育実習方法は、現実の学校教育に対応するためによい方法であろうと考える。十分満足する結果がこの課程の成果によって得られるものと、同師範学校側は予測している。

前述したように、アーノルドは同師範学校を63年に視察した。その際、同校の教育実習について言及している。「実習学校での相互批評授業を参観した。一人の実習生があるク

ラスの児童に対する授業実践をし、他の参観学生たちはその学生の教育実践を批評していた。最後に、教育実習校の教師が、両者のすべての批評に対する意見を述べて総括した。」⁷⁾

先のDr. Morell視学官の「1863-4年度報告書」は、同師範学校の教育実習の内容が改正教育令発行以前と変わっていない、と下記のようにまとめている。⁸⁾

以上の点（多人数学級での教育実習課程の新規導入）を除けば、同師範学校、教育実習校ともに一人の教授・教諭の交代もない。以前からの教育方針が堅く守られ、変わらぬ一貫的な精神で運営されている。したがって、昨年度の視察で推賞した内容に何の変更もない。このような教育が十分な成果を生み出していることは、年度末の定期試験の成績結果を見れば明らかなことである。

我々視学官の短い間の教育実習校視察においても、教師たちが通常のように勤勉に立ち働き、教育実習の学生に模範的な指導法を示して有効な手立てを講じていた。同師範学校の家庭科・裁縫の教育分野の指導監督者としてBrocklehurst女史が選任されたので、女学生に対する教育と方法において一層充実した成果が達成されるものと確信する。

以上のことから、ウェストミンスター師範学校のカリキュラムは、ある程度枢密院教育委員会の定期試験に対応したシフトに移行した様子が窺える。また、アーノルドや Morell 視学官の、同師範学校の教育方針に対する深い理解が垣間見える。形式的にはともかく、全般的にいえば、同師範学校の教育精神の伝統である、人格形成としての教師教養を重視する姿勢は、スタンダード試験の導入により実質的には懸念される状況にあったのではないかと。

(2) 教育実習校におけるスタンダード試験

1863年度のウェストミンスター師範学校の教育実習校とモデル校の教育成果についての報告書において、改正教育令施行後初めてのスタンダード試験の結果は次のように示された。⁹⁾

今年度の目新しさは、改正教育令施行の下での最初の試験が12月に実施されたことである。下記の表はその結果を示したものである。

1863 年度試験	出席者(平均)	受験者	合格率(%)
Infant School	158	61 (6 歳以上)	83
Junior School	143	110	97
Girls' School	81	66	98
Senior School	143	121	98
Model School	120	97	97

アーノルドの同年視察報告書には下記のように書かれている。¹⁰⁾

Senior Schoolは、Bell教諭によって前回の視察時より相当進歩している。生徒は、改正教育令後初めての試験に大成功を修めた。Junior Schoolの特徴は、Infant Schoolと年長の生徒の間の学年を教育することにある。Model Schoolの生徒も一般的に大成功を修めた。Girls' Schoolは新任の女性教師が規律正しく優れた教育をし、試験にも最高の成績を修めた。教室の照明もずっと明るく整備された。Infant Schoolは大変優れた教育をしていて、試験の成績は厳密にそれを前提としている。

翌年のウェスレー派教育委員会は、改正教育令下での同上第2回目のスタンダード試験が1864年11月に実施され、十分満足できる結果が得られたとして下記のような数字を示している。¹¹⁾

1864 年度試験	出席者(平均)	受験者	合格者 (3R's 平均)	合格率(%)
Infant School	172	55 (6 歳以上)	39	71
Junior School	177	131	128	98
Girls' School	114	101	95	95
Senior School	143	115	110	96
Model School(Mixed)	140	125	117	93

以上のほか、46名の幼児（6歳以下）の200回以上の出席が認められた。（注記—合格率は小数点以下四捨五入した数字で示されている。）

下記はDr. Morell視学官の報告書の抜粋である。¹²⁾

Senior Schoolは引き続き優れた教育をしている。今は数名の女子がいるだけで、新規に入る女子はいない。Girls' Schoolが大変よく運営されているので、女子はこちらのほうに入ったほうがよいということになった。教師のBell氏にとって、女子がいようとまいと、新入生の確保に困ることはない状況である。Junior Schoolでは出席者が大幅に増加し、教育が注意深く効果的に行われている。Model School(Mixed)の出席者は昨年より大きく増加し、優れた教育が引き続き行われている。

Infant Schoolは良い運営がなされ、幼児の数を抑えつつ少し増加させるという配慮が働いている。多分、入学幼児の数を増加させるというような計画はもっていないものと考ええる。「しかし、学校の経営者サイドは往々にして、ウェスレー派諸学校全体の模範としての機能を満たすよりも、一般的には、学校を大きくすることに意欲をもってしまうものである。」

（この忠告については、この後の展開を検討すると、後に示す表の通り、この懸念は杞

憂であったことがわかる。)

Girls' Schoolの年間平均の出席者は、81から114人に増加した。また、通常の出席者は、70から140人となっていて優れた教育がなされている。

同上、第3回目1865年のスタンダード試験結果は下記の通りであった。¹³⁾

1865 年度試験	出席者(平均)	受験者	合格者 (3R's 平均)	合格率(%)
Infant School (Mixed)	162	64 (6 歳以上)	61	95
Junior School (Boy's)	177	133	126	94
Girls' School	136	121	118	97
Senior School (Boy's)	138	120	107	88
Model School (Mixed)	145	119	114	95

以上のほかに、51名の幼児（6歳以下）の200回以上の出席が認められた。（注記—合格率は小数点以下切捨てで示されている。）

Senior School (Boy's) の合格率が最低になっているが、これは担当の教師Bellがこの数ヶ月病気のため教壇に立つことができなかったからであり、視学官の視察のときでさえ登校できない状態であった、という説明を付加しておく。

アーノルドの報告書には次のように記された。¹⁴⁾

Senior Boy's担当のBell氏は重い病気のため教壇に立てないので、このコースは十分な教育効果を上げられなかった。しかし、モデル校の担当教員のHollowayによって監督され、あまり悪くない教育が施されている。Junior Boy'sの規律ある優れた教育はその特徴となっている。

Infantsについては、担当教師のBaileyが同派教育委員会局長のTaylor氏が退官したので、交代としてそれに就任するために退職した。しかし、Baileyのアシスタントを務めた教員Brocklehurst女史（家庭科と裁縫科目の指導監督者）による優れた教育により試験の成績は優秀であった。男女共学のModel Schoolの文法の授業は思ったよりも優れていた。Girls' Schoolの出席率は特によく、教育も大変優れている。試験の不合格者は殆んどいない。

Infant Schoolは、合格率が前年は71、前々年が83パーセントと振るわなかったが、上記の理由から、上級校同様95パーセントという高い水準に達した。Senior Boy'sの教育について、アーノルドは「あまり悪くない」というようなあいまいな表現をしている。担当

教員不在のためという理由があるものの、十分な教育がなされていなかったのではないかと懸念される。

同上、第4回目1866年度のスタンダード試験は、12月末アーノルドにより例年通り視察され、下記のように報告された。¹⁵⁾

1866 年度試験	在籍者数	出席者(平均)	受験者	合格者 (3R's 平均)	合格率(%)
Infant School(Mixed)	376	174	59 (6 歳以上)	59	100
Junior School(Boy's)	215	157	122	112	92
Girls' School	265	165	158	141	89
Senior School(Boy's)	160	126	110	92	84
Model School(Mixed)	194	143	126	116	92

以上のほか、61名の幼児（6歳以下）の200回以上の出席が認められ、国庫補助金の対象となった。（注記—合格率は小数点以下四捨五入した数字で示されている。）

Infant School(Mixed)の受験生全員が優れていた。前責任者のBailey教師のアシスタント教員であったJudson女史が、Infant Schoolの正式な担当教員となった。「彼女の能力は、59名の幼児受験者の全員がすべての科目において合格したことによって証明された」と、同派教育委員会は絶賛している。

また、Senior School (Boy's) の教育については、「Bell教師の病気が回復し、教壇に復帰してよい教育をしているのは大変喜ばしい」ことである、と同教育委員会はコメントしている。しかし、上記の表が示しているように、前年度に引き続き、試験の成績は合格率で見る限りあまり芳しくなかった。

そこで、同教育委員会のコメントの真偽を確かめるため、以上の4年間のスタンダード試験の受験者率(%)、つまり受験者に対する出席者(平均)の比を年度順に並べたのが次の表（Infant Schoolを除く）である。なお、1866年の統計には在籍者数が示されているので、平均出席者率(%)、つまり在籍者数に対する出席者平均数比を示した。

受験者率(%)	63 年	64 年	65 年	66 年	4 年間の平均	平均出席者率(%)
Junior School (Boy's)	76.9	74.0	75.1	77.7	75.9	73.0
Girls' School	81.5	88.6	89.0	95.8	88.7	62.3
Senior School(Boy's)	84.6	80.4	87.0	87.3	84.8	78.8
Model School (Mixed)	80.8	89.3	82.1	88.1	85.1	73.3

Junior School(Boy's)の受験者率は常に低く、Girls' Schoolの受験者率は年々高くなり

66年には95.8%となっているものの、その年の平均出席者率は62.3%と極めて低い。つまり、合格率を高くするために有利な状況を作り出した可能性も否めない。これに比べて、Senior School (Boy's) の受験者率は65と66年が高く、しかも66年の平均出席者率も高い。そこで、その教育の内実はそれほど差がなかったのではないかと予測される。

したがって、同師範学校に付属する教育実習校とモデル校の教育内容とレベルについては、改正教育令発行前後において大きな変化はなかったといえよう。しかし、先に検討したように、ウエストミンスター師範学校の教科目編成は、枢密院教育委員会の女王奨学金試験に合わせたものに少なからず変化し、高度に教養的な科目は削減されてしまった。また、その教科内容や教育実習のカリキュラムはある程度枢密院教育委員会の定期試験に対応したものに移行した。同師範学校の教育精神の伝統である教師教養を重視する命脈は、形式的に辛うじて保たれているという状況にあったのではないか。この点についての具体的な検証をさらに進めたい。

【註】

- 1) *The 25 Annual Report of the Wesleyan Committee of Education. 1864*, London, 1865, Appendix.
- 2) *The 24 Annual Report of the Wesleyan Committee of Education. 1863*, London, 1864, p. 23.
- 3) Pritchard, F.C.; *The Story of Westminster College 1851-1951*. London, The Epworth Press, 1951, p. 39.
- 4) *The 24 Annual Report of the Wesleyan Committee of Education. 1863*, op. cit., p. 23.
- 5) Ibid., p. 24.
- 6) *The 25 Annual Report of the Wesleyan Committee of Education. 1864*, op. cit. pp. 23-4.
- 7) *The 24 Annual Report of the Wesleyan Committee of Education. 1863*, op. cit., p. 24.
- 8) *The 25 Annual Report of the Wesleyan Committee of Education. 1864*, op. cit., p. 24.
() 内筆者加筆。
- 9) *The 24 Annual Report of the Wesleyan Committee of Education. 1863*, op. cit., p. 25.
- 10) Ibid., P. 24. p. 26.
- 11) *The 25 Annual Report of the Wesleyan Committee of Education. 1864*, op. cit., pp. 26-7.
- 12) Ibid., pp. 27.
- 13) *The 26 Annual Report of the Wesleyan Committee of Education. 1865*, London, 1866, p. 52.
- 14) Ibid., p. 53.
- 15) *The 27 Annual Report of the Wesleyan Committee of Education. 1866*, London, 1867, pp. 15-6.